

発展途上国への支援のあり方

大阪市立咲くやこの花高等学校 2年 上野 晃太郎

先進国に住むわたしたちは、しばしば発展途上国の人を支援しようと行動することがある。例えば、募金活動を行って経済的な支援をしたり、要らなくなった古着や文房具などを物資として現地に送ったり。そういった活動をすることで、社会的な評価が上がり、企業や個人のイメージアップにつながる。困っている人を助けよう、という優しさは確かに賞賛されるべきだと思う。しかし、お金やものを与える、というのは少し一方的ではないだろうか。仮にその支援で途上国の人の生活が改善した、としても一時的なものになる。お金や物資は有限だからだ。消費、消耗すれば無くなってしまふ。本来、支援というのは、困っている人が自立してその困窮した状態から抜け出すための手助けをすることであり、単に目に見えるものを与えるだけではない。発展途上国の現地の人々が自分たちの手で発展していけるような形で、わたしたちは支援していかなければならない。

アフリカのある地域では、途上国支援の一環として寄付された衣料品が問題となっている。ヨーロッパをはじめとする世界各国から過剰に寄付された衣類が大量に余っているのだ。その余ったものは、現地の既製品よりも安価に転売され市場に出回っているという。しかも、衣料市場の約三分の一を占めるほどにまで地域経済に大きな影響を与えてしまっており、地場の衣料産業は厳しい状況に追いこまれ、廃業する者も少なくない。廃業がこのまま続けば、地場産業としての市場が潰れて、その成長や努力がストップしてしまう可能性が高い。寄付された物資に依存した経済では、産業自体の腐敗に繋がりがかねない。衣料の不足という困窮した状態は解決されたのかもしれないが、継続的な発展は見込めなくなる。自立の手助けという面では完全に逆効果となってしまっている。こうした一方的な支援活動が行われる状況を打開し、発展途上国へ効果的な自立支援を行うにはどうすればよいのだろうか。まず、一方的にモノを与えて終わり、という方法を変えなければならない。一度きりの支援ではなく、段階を経て発展していくその過程を援助していく。継続に支えることで、長期的な発展効果が見込める。また、現地の人々の自立という点が最も重要であるから、受動的に支援を受け続けそれに依存してしまうという事態はなんとしてでも避けなければならない。支援する側がいなくなれば、元の困窮状態に逆戻りだ。支援活動を終えてからも自分たちで活用できるようなものを残さなければならない。

発展途上国の、現地における自立支援の例として、国際NGO“ウォーターエイド”がインドで行っている井戸修理の技術支援事業がある。壊れた井戸が約四千台を超えるある地域で井戸の整備士訓練プログラムを二年前に開設し、現地住民を対象に技術訓練を実施したという。同NGOによると、この訓練プログラムにより、約三百台以上の井戸が現地の整備士の手によって修理されたという。しかも、女性の整備士も誕生したという。井戸掘って終わり、その後は放置、というパターンも多い中、非常に有用な活動だと思う。

発展途上国への支援活動は、現地の人々に寄り添い、彼らの意志や裁量の範囲内で自立できるように行ふべきだ。今ある彼らの生活や現地の経済は傷つけず、段階的な発展を援助しなければならない。また、支援はいつまでも続けられるものではない。長期的に自分たちの手で発展できるよう、技術供与や教育活動といった支援を行っていくべきである。最終的には、支援者と被支援者、先進国と途上国という関係に縛られることなく、すべての国が同じ立場で連携できる社会が実現できるだろう。